
Lost fantasm

によろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost fantas m

【Nコード】

N8403A

【作者名】

による

【あらすじ】

幻想が枯渇した世界で、幻想に惹かれ、幻想に焦がれ、幻想に触れ、幻想に蝕まれ、幻想に至る者達がいる。Lost fantas m、失われた幻想^{ユメ}を求め続けることで人は魔^{ユメ}に変ずる――。／幻想追い人にして幻想破壊者ファントムは、瓦礫の山の中で虚ろながらに夢を諦めていない機械少女を見つける。それは神話の中で描かれる、小さすぎる一瞬の幻想^{ユメ}。――その出会いに、意味などあったのだろうか。

0/Born again

0/Born again

一面は瓦礫の砂漠だった。

空気中に淀み出るほどの死の余韻。

蔓延している浅い毒性のガス。

その中を、一步一步確かめるようにして歩いてゆく。

屍の山。瓦落多の山。

血で滑って転び、破損した鉄チューブで足が引き裂かれた。

吐血。

そもそも長く持つ身ではない。それは自分自身がよく解っている。

エンジェル症候群。

一時気前、人類と天使の戦争にてもたらされた病。

大戦の折り、腐りきったこの世を浄化するために天使が吐いた聖なる毒。

人類を三日で滅ぼし得る決戦兵器は、しかし人類を滅ぼしきることは出来なかった。

天使に抗しうる『英雄』が出現したから。

即ちセイントロード、ソードオブクルセイダー、ガンヒルドゼファア、ダグナルード、フィストマスター。

ネームレスと呼ばれた存在が極めて幻想に近い者達。

彼らの力で天使の勢力は一掃され、残った僅かな天使も実験用サンプルとして捉えられ、時空の狭間に逃げ込み、虚数の世界で虎視眈々と再起の機会を窺っているのみだ。

だから、毒を浴びたのはほんの少数でしかない。

しかし、運の悪い人間というのはどこにでもいるのだろう。私こそその一人だった。

エンジェル症候群は別に死に至る病ではない。

その病に掛かったものは、徐々に原初に回帰しようとする。

人類というカタチを得た者から、天使・精霊——そう云ったカタチを持たない幻想へと。

少しずつ少しずつ、存在が稀薄に——意志が曖昧に——心が透明に変化してゆく。

だから、俺には生きる意味なんて考えられず、

生きたいなんて意志も存在せず、

ただ何か目の前にあるものに引かれて歩いてゆく。

瓦礫とがらくたと廃品と壊れた兵器と屍の山の中。

唯一興味を持てる銀色の羽が、

まるで天使のような錆び付いた双翼が突き出ている。

それを、

それに出会ったのを、

それを発見したのを運命とでも云うかのように、俺は一步一步踏みしめてゆく。

既に足はガタガタと震え、まともに歩くという動作が出来なくなっている。

だが、その何かに触れたくて、解け合いたくて、ひらすらに歩いてゆく。

届かないものに手を伸ばし、一步、一步、一步。

手が、

手が、

手が——触れた。

それは鋼の感触だった。

ドン——ドン——ドン——

鼓動が、聞こえる。

ふと、下をみると、焦点の合っていないそれと目があった。
まるでラピスラズリを埋め込んだかのような儚げな光を放ち、
機械人形染みた無機質な表情でソラを見上げている。
がらくたの楔を繋ぎ止められた鉄の少女。

今にも消えてしまいそうな朧な幻想。

ドン——ドン——ドン——

鼓動が、聞こえる。

きつとそれは目の前の幻想のものだけではなく——

心音が、重なる。

ドン——ドン——ドン——

ああ、そのとき俺は■■■■。

「あ——あ——」

生きている。

この死にかけた幻想は、僅かだがその曖昧すぎる意識の中で、生存を望んでいる。

ここまで稀薄な幻想に落ちたのだから、そんなものあるはずはないのに、

俺も——

「おい」

足下の鉄塊に話しかける。

その鋼の天使は相変わらず虚ろな瞳で、反応の一つしやしない。
だが、その双眸の奥、その一部のどこかに、俺は何かを見つけた気がした。

だから——

「生きたいか」

ドゥン——ドゥン——

心音が小さく、小さく、

「お前は、まだやりたいことがあるのか」

ドゥン——

小さく、小さく、

「何か云えよ」

小さく、小さく、

「タ……S……け……てえ」

臃気な、しかし確かな声で呟いた。

0/Born again (後書き)

—あとがき?—

初めまして、よろしくお願いします。

この作品、Lost fantasmは、限りなく幻想に近くなつて自己が曖昧になった主人公ファントムが、がらくた同然になりながら何かを求める機械の少女に出会い、自己を確立しうる目的に辿り着——けるかどうか(え?)というお話にしたいと思います。

ですので、あまり長々と文章は書かない方向で、短編の連載という形式をとらせて頂きました。きっと五、六話で終わると思います。それと、先に断っておくとこの作品には元ネタというか参考にした作品が四つほどあります。

それが何かを考えながら読むのもアリかも知れません。

それでは、少しでも楽しめて頂ければ幸いです。

1 / Scrap city

ショウウィンドウの中、華やかに着飾ったマヌカンが窮屈そうに屯している。

商店街を行き交う人々はまるで訳知り顔で踊り狂っている。

そんな街を歩くと、つくづく孤独を実感させられたものだった。

表面上は全ての人類と繋がっていながら、水面下では己以外のこの世の全てを排斥してしまっている。

誰もが自分自身を演じ、自分自身を傍観者に祭り上げる。

まるで、瓦礫とがらくたと廃品と壊れた兵器と屍の山から、一人ソラを眺めるかのように。

隣り合わせながらくたと自分はまるで何の関連性も持たず、そもそも自動的に思考する廃品コンピュータ程度の認識でしかない。

自分を愛せるのは自分だけ、他人を愛するのも自己愛でしか有り得ない。

そんな中を、変わらず俺は歩いている。

それらスクラップの一つとして。

「お帰りなさい」

古ぼけたマンションの十三階。

大分錆びてきている鉄のドアを開けると、錆びた天使が俺を迎えた。

大きすぎる羽は取り外し、倉庫に預けてあるから、部屋のスペースを取ることもない。

俺にとっては空気と同じ。そんな考えで彼女を部屋に置くことにした。

廃品の中から引き上げた時はボディに幾らかの欠損はあったが、町外れのジャンク屋で代わりは幾らでも見つけることが出来た。

「これを着ろ」

そう云って買ってきた袋を投げ渡した。

危なっかしい所作でそれを受け取った彼女は、惚けたような顔でこちらを見ている。

「少し外に出るぞ。……それとも全裸で出るつもりか？」

金属製のボディの上をカーボン樹脂で覆い、更に特殊ラバー外装が施された肢体は、通常の少女のものと見まがうほどだ。

幾ら機械とはいえ、奇異の目で見られるのは必定だろう。

それを理解したのか、否かは不明だが、どうやら彼女は投げ渡された衣服を着ようとしている。



「ねえ」

衣擦れの音が止んだ後、俺は宣言通り彼女と外へ出た。

やはり変わらず行き交う人々を気にもとめず、俺達は或る裏路地へと入っていった。

そこは、俺にとっては何より落ち着く場所だった。

いくらがらくたとは云え、あんな狭苦しい部屋で二人きりというのも過ごし難い。そう思い、とりあえずこの場所に来てみたが、だからと云ってあまり改善されたことはない。どうせアパートには戻る羽目になるのだから。

することもないので、裏路地の生暖かい風に当たりながら、少し放浪する。

ソラも自ずと付いてくる形になり、しばらく、全く会話のないまま歩いていた。

「――あなた、誰？」

藪から棒に、ソラが切り出した。

歩きながら放たれたそれは、どこまでもシンプルな問い。

確かによく考えてみれば、俺はこの少女に何一つ情報を与えてい

ない。自分の置かれた境遇を理解できないのは当たり前だった。

だが、かと云って語るべきことが何一つないのもまた事実だった。

「俺は、何でもない」

裏路地を吹きすさぶ風は寒くて、どこか寂しかった。

「――ただの亡霊だ」

「亡霊？」

「そう、亡霊だ」

そう云うと、彼女は何やら困ったような、そうでもないような顔をした。

「亡霊……さん？」

「そうだな――俺に名前なんていらないが、どうしても呼びたければファントムとでも呼んでくれ」

すると、今度は途端嬉しそうな、しかし矢張りそうでもなさそうな顔になる。

「ファントム……」

それは、響きの余韻を楽しむかのような、そんな感じだった。

そうして、俺も同じ疑問に辿り着いた。

「そういえば、お前は？」

空気みたいなもの。あってもなくても変わらないもの。

それに名前がある必要はないだろうが、しかし、拾ってきた以上名前くらい知っていてやってもいいだろう。

「ない」

「？」

「強いて云うならコードがあったけど、私が役目を終了した時、剥奪された」

悲しそうで、そうでもないような顔。

「だから、私に名前はない」

「そうか」

コード。

機械を管理するために割り振られるナンバー。

そして剥奪されるということは、量産型か何かだったのだろうか。
或いは兵器だった可能性すらある。

それは――

「私は――天使と戦う為に、或る天使をベースに作られた量産型の一つだった」

それは、何という悲劇だったのだろうか。

戦うだけ戦わされて、用済みになれば廃棄される。増して、代わりは幾らでもいる代用品。

興味本意のつもりだったが、もしかしたら、俺がこれを拾ってきたのには何かの意味があったのか。

既に必要とされない少女。廃棄された鉄塊。喪失した幻想。

そんなもの、必要とする人間が、果たしてどれだけいるだろうか。どうやら彼女もその疑問に至っただけらしい――

「何で、私を――」

拾ったのか、と少女は訊く。

既にがらくた同然で、何も出来ないであろう少女を。

それは――

「別に。助けを求めていたから、助けただけだ」

本心の内の一つだけを、口にした。

自分の意志とはあまり関係なく、ただ他人の望みの為にだけ。なんて嘘を。

「迷惑……?」

「――お前は空気みたいなものだ。別に俺がそうしたいからそうしただけだし。いてもいなくてもいい。ただ、

別にいたければいい」

「――」

少女の表情はどこか悲しそうで、どこか嬉しそうで、それでもどこか無機質めいていた。

その目線の先は、この世界とは相容れないような青い青い空を捉えている。

俺も、その視線を追う。懐かしい、その場所に。

「ソラ」

「え？」

不意に浮かんだ単語が、勝手に口から出た。

「お前は今からソラだ」

それは本当に単純な思いつき。

嘗て使い捨ての兵器だった少女。

限りなく幻想に近い少女。

がらくたの中に埋まっていた少女。

その中で、いつまでも空を眺め続けていた少女。

そして、それは、その名前は――

「俺にとって空気みたいなものだしな、そう遠くもない」

彼女は、一体、その果てに何を幻視したのだろうか。

「そ、ら……」

「そう、ソラ。誰もがどこかで惹かれて、誰もが特に気にしないモノ。がらくたのお前には丁度いいだろ」

ソラは、やはりどこか嬉しそうな、そうでもなさそうな顔で、遠いソラを見つめていた。

このがらくたの街から見える、唯一澄んでいる日常を――

2/Lost fantasm

いつもは青黒く見える夜半の空が、今日に限って少しばかり灰色に見えた。

はたしてそれは、もう死んでしまった筈のカミサマの気まぐれか。その様相は、今の俺を取り巻く現状をリアルに反映していた。

――
一発、二発、三発、四発、五発。

立て続けに空をゆらして、重い銃声が風を風ぐ。
時が止まったかのような錯覚。それほどにその一瞬は鮮やかだった。

左右から襲い掛かる黒色の牙、漆黒の怪物、暗黒色の幻想達。

その悉くを俺の銃は撃ち抜いて、ただの一瞬で封殺する。

神業に等しい応報――しかし、俺の胸に去来するのは、伽藍堂の虚しさでしかない。

それは、当たり前のように繰り返される”日常”のようなもの。
昨日あって、今日あって、明日もあるかも知れないというだけの、ツマラナイ出来事。

だから、そんなのは単純作業と何一つ変らない。

銃を構えて、標準を合わせ、ハンマーを起こし、トリガーを引く。
状況に応じて対応は違えど、やることは大して変らない。

砂利、砂利、という何かが歩く音。

どうやら、死に損ないが一匹いるらしい。

だからといって何一つ変えることはない、俺がやることは一つだけ。
だが、標的を捉えた銃身は、しかし、予想外の事態に停止した。

「ついてきたのか」

明らかな人工心臓の音。モーターの回る音。間接の駆動音。

とても人間の出せるものではなく、そして左右のバランスが取れていないなんていう不出来な機械は、この町中でもソラだけだろう。
「……」

申し訳なさそうに、それでも無さそうに、ソラは俯いている。

夜中の二時過ぎ、場所は件の裏路地。

その、驚くほどに人気のない暗がりで、銃を持った異端者とがらくたのお姫様が無言で向かい合っている。

「悪いが今は仕事だ。わかったら大人しくアパートに戻るなり、何処かに消えるなりしてくれ」

毎日とまではいかないが、短いスパンで繰り返される幻想狩りという行為。

ただ一人でコツコツとするそれは、単純作業でツマラナイこと極まりないが、しかし、仕事に無関係者を巻き込まないという最低限のルールくらいは今までも守ってきた。そして、それはこいつであろうとも例外にはなりえないだろう。

俺は、ソラの退場を命じた。

しかしソラは、少し躊躇した後、

「――嫌」と自分の意志を表明した。
溜息。

「命令を聞けない機械は欠陥品だろ」

そう云うと、ソラはまた悲しそうでそうでもなさそうな顔をする。
だが、ここにいるということは、それなりに危険だ。
でも――

「がらくただから当然か」
空気だし。

別に俺が気にする問題ではない、ない、筈だ。

だが、次にソラの口から出た言葉は、俺の予想とは違っていた。

「ありがとう……」

それを居て良いと解釈したのか、ソラはまた妙な顔で礼を云った。

何故、何故だろう。

何故、そんな顔で笑うのか。

「ただし、危険な仕事だ。死にたくなかったら自分の身は自分で守れ」

幻想狩り。

普通の人間にとっては胡散臭い、それでもどこの街にも必ず必要な仕事。

掃除屋染みたそれは、確かに危険なこと極まりない。

だが、所詮はがらくた。興味本意で拾ってきたモノが壊れようと、どうということはない。

そうして、ソレが始まるのを待った。



酸の混じった雨がぽつぽつと降り出してきたころ、その現象は始まった。

ぞぶり ■ ぞぶり。

聞こえる。

泥が蠢くような、不快すぎる不協和音。

「来たか」

裏路地の奥、暗がりの果て、限りなく黒という原色に近い色の中。

ぞぶり ■ ぞぶり。

「何——？」

何か得体の知れない幻想が渦巻いている。

それは、さっき削除した怪物とは比べものにならないほどに巨大な、虚。

ぞぶり■ぞぶり。

ソラは事態を把握出来ないらしい、そのラピスラズリの目で、俺に答えを求めている。

「見てれば解る」

そう云って身構えた。

そぶ――

音が止まる。

それは、いた。

裏路地の隅から湧き出て来る。

黒い、

染み――

「走れ」

云うと同時に彼女の手を握る。

裏路地の、染みの反対側へ、逃げるように走ってゆく。

ぞぶり■ぞぶり■ぞぶり■ぞぶり。

徐々に、少しずつ、染みは現世に浸食し、終局には一つの巨大な闇となつて、俺達を追ってくる。

「拙いな、大物だ」

懷からリボルバーを取り出す。

腕を地面に平行に伸ばし、ハンマーを起こし、照準を定めて、トリガーを引く。

■射撃、■射撃、■射撃――

馴れたとはいえそのあまりの衝撃に、腕が痺れる。

だが、そのリスクを補って余りある、殺傷能力過剰の454カス

ール弾が幻想の黒い闇を打ち抜いてゆく。

その悉くが暗黒を打ち抜いて、

その悉くが僅かな損傷しか与えられなかった。

通常の獲物ならば即死確実なダメージを与える致命的な兵器。

しかし、幻想——しかもこれ程の存在感を持つ大物には通用しない。

「駄目だな、あんま効いてない」

あまりに巨大すぎる影。

その前には454カスール弾とて大して意味をなさない。

ソラは、何が起ったか解らないという顔で、影を見ている。

「——あれは？」

「ロストファンタズム。ネームレスはそう呼んでいた」

LOST FANTASM。失われた幻想。

「神を失った／夢を失った／幻想を失ったこの世界に於いて、それでも幻想に焦がれ続けたモノの成れの果て。そして、エンジェル症候群の末期患者——」

まず、他者との隔たりが出来てきて、望むモノがこの世界になく
なると、ロストファンタズムは発祥する。

——例えば馬鹿な何処かの誰かが救えなかった彼女のように。

彼女が何を望んでいたかは解らないが、それを失ったために彼女は天使になった。

つまるところ、天使なんてのは神がロストファンタズムに与えた
一つの方向性に過ぎないのだろう。

「元はただの人間に過ぎない、こいつも、天使も」

「それは——」

彼女がまた悲しそうでそうでもない顔をする。

「可哀相……」

「――」

それは、毒だった。

空気ではない筈の、がらくたでしか無いはずの、俺に影響を与えてはいけないはずの存在が。

解ってはいけなかった。

だが、どうしてか理解してしまった。

ああ、こいつは――

「――クッ」

立ち止まる。

このままでは殺されてしまうから。

シリンダーに『幻想弾』を込める。

俺は殺されても別に文句はなかったけれど。

影が来る。

しかし、何故だろう――

照準を定める。

そこにあるあたりまえの為に、引き金を引いた。

『――あなたが■りたい■のを■り、■んだことを■タチに出■
■ように――』――違う。

――照射。



「k、ハ――」

吐血。

身体が云うことを聞いてくれない。

グルグルと世界が回り、ありとあらゆるモノが虚像に見える。
そう、そこはまるで幻想の世界だ――

約束ですよ。きっと、私の為に、一度、その銃を使ってください
ね。

既ニ知っている結果を求めて

ああ、お前が死ぬ前に、一度だけ、俺はお前を――

未ダ知らぬ悲劇の為に

一瞬、懐かしすぎる、既に自分のモノではないユメを見る。

「やべ、あっち側に引きずられてやがる」

血の掛かった手を見る。

――そして、愕然とした。

覚悟はとづくに出来ていたつもりだった。

しかし、シミュレーションなど所詮空想に過ぎない。現実^{リアル}の重み
との間には、決して埋まらない溝がある。

手に掛かった俺の血液――吐き出したソレの中に、幾らかの金色
が混ざっていた。

すぐ近くで、ソラが呆然とこちらを見ている。

「ファントム――？」

その声は震え、強い感情で今にも押し潰されそうだった。

水銀の涙が、つう、とその頬を伝う。

「ああ、悪い。少し目眩がしたただけだ。――あいつは、どうなった
？」

俺は、あの黒い染みの幻想に向かい、リボルバーを構えて、それ

から――

「――光に包まれて、消えた。それより、ファントムが――」

ああ、どうしてだろ。

何でこいつは本当にそんな顔しか出来ないのか。

「そうか……」

本当に気分が悪くなる。

ソラの顔を見た所為で。

その痛みを知った所為で。

――何より、彼女の為に行動を変えた自分の所為で。

「いや、気の迷いだ」

「――え？」

不思議そうに覗き込んでくる。

「いや――」

ここ数日。彼女を拾ってから、ソラが何かをしてくれた訳ではない。

むしろ義手と衣服代と他諸々の生活費の分、邪魔にしかなくなってない。

「何で――」

今度の疑問は、ソラの口から出たものだった。

「何で、ファントムは、こんな仕事を……」

感情が表れた無表情が俯いている。

その疑問は、或いは俺自身の命題だったかも知れない。

「――さあな、幻想を狩るのは幻想に近いヤツがやればいい。

それに俺は亡霊だからな」

ただ、それだけ。

それ以外の意味などわからないし、生きている限りわからないだろう。

ただ、生きるために毎日を過ごし、働くために働いて、わかりやすい意味を見出すために人と繋がろうとする――まるでこの世界のように。

ああ、そうか。

俺がこいつを連れてきたのは、この何でもない残酷な日常に、何か一つ意味が欲しかったから。

無機質過ぎる現実^{リアル}に、一滴の幻想^{ファンタズム}を入れ、緋い交ぜにするために――

「この世界は、残酷な程退屈なんだ。だからヒトは幻想に焦がれる――溺れるに足る幻想に。Lost fantas――あいつら（オレたち）は有り得ない幻想でしかなく、幻想を求めたヒトの成れの果て。ただ失われた幻想^{ロストファンタズム}を自身で補っているだけだ。狩る方も、狩られる方も」

「ファントム？」

「なあ、ソラ、」

あのがらくたの中で懸命に手を伸ばして――

「お前は、一体何を幻想したんだ――？」

2/Lost fantasy (後書き)

あとがき

今回はタイトルと被ったサブタイトルの話。

Lost fantasyとは何なのかが、早くも主人公ファントムの口から語られます。

天使と神と英雄のいた世界。そんな荒廃的でファンタスティックな世界に主人公達は住んでいます。それでも、そんな我々にとっての非日常の他に、確かに日常的な毒物が混入されています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8403a/>

Lost fantasm

2010年10月19日18時13分発行